KODAK Color Control Patches © The Tiffen Company, 2000
Kodak LICENSED PRODUCT

赤2
370
3

蘭學論

上

東京帝國大學圖書
和
370
3

詞通路下巻

詞てにをはのかゝる所の事

すべて詞もてにをはもおほかたはかゝる所あることなり欲ふかくとも是をよく見てはあるべからぬにいふよくはしくてにをはの事ハこれ迄をくはしくしるせる書どもぞあまたあれど又人もおもふといふ事なれば人々おのがじゝ見きゝててにをはたがへるよろしくてはえあるまじき詞と思ひていふてよく明らめくやとおもへどもいふつかへることぬかゝるところのさゆゑをむかしよりこれもことゝしていへることなけまして詞よくこゝろうるともそこゝろもおのがうるさいろつの所にて

けれとなをさうよはさるもてゆさそを代うたさのあやまり
多く出来ふけるをりけりそハ次の詞くのこかゝるもあり
一そはうゝゝこと〳〵くうゝもありあるを自をとれうを屋
てくかゝるもありてをうゝうさ屋とさまゝくなれとおのつゝを
宣ひあ事をりを見ゝふ時を詞とはゝ或ハ自他いり
まをうけちめをうハ下ようゝくきをあくきるを詞なく
あるハをゝ一とゝの清ひをてよふうけあゝハなりあゝ
きる事なれて欲学せむとゝうハかゝハをゝてを之あるをを
き事なり又古歌のをとをよく分むよハ此てをとしさゝゝこの
うゝる不ををきまゝをうを第一の肝要なり是をその会は註釋

ともまゝて此うゝる不のさまをくゝゝをきまゝをゝ屋るを
よりてををきなゝ不をうゝくをうを分るをさをるをてその執さ
をゝ不ををゝふわさまをる事あるゝハてをもすしいを
さまをふそれなゝゝていとたゝゝけるをみゝうゝ欲をもむ
ゝを此うゝる詞のさまををゝ分るなゝ上下のゝくのひゝけ合
なといさゝうをなゝう事なうゝけれくゝゝゝく毎へを屋へさ
事をりおのれをゝ初学のゝをわゝこの言を多ゝ入てをゝを
かを毎あ中をゝ事多ゝれをいをて言ゝをあむを思ひをりけををふ
いうゝくの言ゝをゝれう毎出てををうゝるをゝれををを
分ハ毎をうゝき根よ下をつけ爲なをゝ引て故一倫しをを

此ものゝ〜は次の句へのことかゝるを考へせるなり

□ 此句はその句てゝるをそのゐをてゝ也終とこゝるこゝろを考へせるなり

□ 此句を下よりよこゝてかゝる所を考へせるなり

□ 此句はこのなこゝろてきるを考へせるなり

□□ 此句を両後よりくる詰ふてゝをゝを考へせるなり

□ かゝこゝたるを枕詞なり

枕句をつけいくまたゝきまとも多うれと中こゝろつゝく

初学のともこゝふ思ひまゝふ〜又第よは出取新き事とのく多

そゝこゝろこゝろ〜ゐはておのこゝろさゝるべき事なり

いそのこゝみ

ふるき歌の句〜きゝこゝろこゝてゐ考へ紀書れ

時雨は下よりのもゝをそてきるこゝ此歌おゝゝなこゝ

てきるこゝ

ふこの家はさゝの月新さひゝさもきみこゝまくはみを妨あ

月新の下よりのもゝをそてきるこゝ

時雨なくやさくきの河やあ家あやゝもきこゝめこゝひもきこゝを

やゝ助字なりあやゝもと句を考へて上八序なり

ひつぬれこや人のこえつむ美と彩をはさめけるものしを。

そそとのものこころなり

ゑしやいらつや人こそつこうるめるくいひてこと〻忘れど

うやと何を手紙てあやをなせうやを歌まるうさやくさを

にのこゑなり

枕草紙なこころつらみてむすめ美をとこ行こしこな

なこころはしよのもしをそそこころはるゆきり

なこしひとし中こう偽ちもちふちそてやんせしるれ度のこるきみ

只れるのこしそをおこれるまをなこ 結るを中欲の

上の白れこまなり

いこつこふこる月日は堪ほえて如こそこ恵おこもくなき

なれくてこもちこれまそこるなれ者川の如はこと事

四れるひうけり

野露のおくてぬいる袖うつそめふうき世中を思ひけるこう那

ちくらはあじとれし人も着そそれが庵のほとりたちまさ

これる着まなりてのことなり

久かる比ひかりのとくきさの日ふきつふなくこれのちるを世かる

けらんを上へ行とてとうかとをいれてみる格なり

ちせこの夜は花をむさるしうちめつましき秋の夕べの風

うらめつましきは夜の書をいふなり

そろ清くの思しまの人ちゝは秋のつとふりいさといきましを。

の゜そが。のことを゜はとのをのことなり

は台風よとくる水のひまこゝふおけり物のやさる何か風

初花の下ふなりむとうふことをそへてこ待うる例なり

けふこゝにあるを見とて隆なまうし清まろあれどもむとうんうしや。

やをやをのをとてうくうるをなり

けふのことをもをもしるあ時くるるとうしるとをすきむはうけうこそ。

うくしをうくうるをなり

秋を寄こゝ宿りあれうはなくちるる萩の葉もうつろひもけり

秋のさむさふを立をうるとひちやせり

みのれ示るるまて流るるつこゝにいるえきとて意しこゝるむ

いつとこゝをうる移てう序分なり

なるれてをいまやの山は中るおつるるしみの河はりしや四中

うしこを移て何をあやちやせりやハ歌意なり

ふるして志あるる地辺は昭小松ひとそや子代の像をるる雨

[illegible]

ぷそうなのとのたのやくといふことをてたとくるり

あしたんあもうきりの亦身のこゝろ吉野ひさ〳〵ものもどころ[illegible]もうな

こゝれ白を亦身こゝろといふことをよいひうけこゝろ

[illegible]の肉小吉を[illegible]多利[illegible]ひとそとやいこん[illegible]さとこゝとやいこゝ[illegible]

う色。う色を秋ちきはやけのさこゝむ[illegible]を[illegible]ちこめ[illegible]根きえこれめや。

ぷを四字なり　ぷやをうくこゝる句なり

これや生色ちこゝろ[illegible]ていふ病を紀路こゝろ行のりとふ名よりおふせめら

結ゐのてよなんとふこゝをそくてをゐこゝ

ゆくこゝ山ちこゝろきこゝてあこゝ紙のせきめこゝ[illegible]ふとこゝ[illegible]をこゝるこゝ邪

あふ坂を色こゝふひをせち

五月雨ぞ。おもふのうへにおきて草かくしてや。消の下みちなる

ぞをうけのとまりや。としハ木のやとりふつきとさへそひうる
きまうりてうへそり

よそふれてきこゆましいとのを吉野川淀るとなしふるゝ風そひなむ

けけむを上へ何しらとつふことをとりれてみる格なり

いつくりとおもふ物つくいまゝくふとつ織をつ見れをおもひまむ

冬の雨ふおつるさ河きの深草の。しきるりあれや結をつこえてるあ

うけとを結てあやをとなせり文の。をのことくのことをとうめくり
あれやをあれそそりやのことなり

貧安しもあさし男をなそ。もうくあまのうるもぶ。おもひみてて

ど。をなするのとのさぞ。そのやくよのことなり

墨染の君のつもとハ和しなれやたえハかるるれあめやのつ帰る

なれやをなれしまやのことなり

梅のえだにうぐひすなきてはるたちぬとあるを

初の句梅むめのうぐひすとはふるきことなれど初の句

この句へ手をつけ〳〵四の句を伊勢物語のことをとれる歌なり

うめのえだにうぐひすなきてはるたちぬとあるを

この句著のかくこそといふことなりのハふるのことなり

岩根ふみかさねふるゆきをけふこそはむかしのあとのまつにとは

のこなるのことなり結句を歌のことなり

雨うちそそぐまつのはのうへにやどりてこゝろ美をいくよぬれつゝ

この句いいうけなりやそうびしゝのやなり伏見をふ

といふことよりもうびしゝ

墨にあらしてはやあくぬと恨てもそれはちつるこゝろ紙なりの句ら

二の句を伊勢物語の歌ふるはちふよハはちふの家よのこ

こゝろなり

雨ふるこゝろふ秋のむしのこゑてあ美よりはこゝろみなこゝ

秋よ他をうゝこゝ此歌をそを考よなりてなり

[illegible]

これもそひみるもの　陸奥よりこの移り

かなしさは秋のさそふ水のきりぎりす枯れる草に移るやなくらん

さつのゆき　なにはびとにいふことをうけつ

うきなよりも今はあしの山風よ先やなにはのゆめのうらもむ

これもそひみるもの

契あるてけふやにのゆめのうらもさまてもうけて秋まも

宮門にこるとしてすをうけつ

うのせこそいつちゆめとさきはのそひよ森しく今の悔しも

これもむとしてくきをめとしくるを東をなれをもしも

もろ和字なもの

長月秋の名菊つくりやもろくこの人のそそふりて人のけ戸む

秋をふるまつまくとしてお事をうのつ

法こゝろの糸ゆをうけてもつゝつゆをむすぶやけるその色をさう

法師のゆゝしきをそてをあつしぶそうれのこゝろ

ゝきこゝれるれのこゝろも夢れと今ひとゝほのをぶちつけて

ちゝこゝろ夢ゝゝれるひとゝ人のこゝろあるれをうせ

法ゐをなせよあれぬそとゝてこゝろ

むつゝ今ゐふゆゝやゝく凡のゆゝゝも人のきこえさゝこゝ

け秘河をたゆゝくゝれゝ仏かるもあゝ

あひよゐひて相ゆふ比の永紬やゝゐほさゝゆゝゐほなる

なゝるゝゝゝとゝゝてゝゝて変格ゐゝ

紫比一ゝゝゆゝふむゝゝ比めゝゝゝふゝゝゝあゝゝゝゝゝゝ

ゝれゝゝゝハ名なゝゝゝゝゝゝゝゝ

あつまち

いそのかはらうるはしうて　きよらをまさ　ゆむ

ものせこを　ぬよりやりて　ぬくるものまそうさの　ぬのまへそこひしき

ねるゑ　ぬをうゆく

ねはやまして　ゆきあおくふの　ゆうこふめるれぬ　ひさしれをもを。

をもなくこのとのとのこまり

大原やをしの不ぬ山をけふこそ　神代のことも　ゆかしつらめ

やをを不得ふひいくこまり

みちしの　ゆをを山とかをまくて　白雪のかくみ　ひくこよ　春ハまきみり

いそのうこふ　ふるゆの橋　をを　絶て　春をうすれぬ　うこんなるこむ

部引こゑ聞まつ不とをかくる器のもれきつくるまちやぬれまし

さくられをり吹風を身ゐそ去秋のこけれ母をうくるむ

山れをを出てもれの木のまよりら紙つくしれ。あり行者の身

おるまりたをくとうたてのをなり。のハなまのをちり 後白ハ

いひけなをを

幾行もれ涙ゐ志をれてきゆゆ神ゆをまるるこのみをふるを

いつゐれ苦れ絶よつゆおまてきるぬやま紙の母をうくるぎ

あるしつく紫れ石菜の日ゐそを志とるかなりゆくるう涙ゐ

のきのこくのをるり

来の春ととめたるつらねは世中のおくれさきだつ人なるべし

初二の句は来の春ととめるの本意やのことなり

あらさましも後志のくとや神のまをむしちらすれよどく色を

神代うけつのあとや八束穂より唐田の稲はたそたそ事む

沢まも美もうれそ[illegible]

誰そ[illegible]計家の戸おそうるうみ小家貧を座りていそふ時を

二の句はよくとをそてとをつ

今をもるうき船と人まもるを星をはうれもうとうけ

ふるゝ風をかきてうゝくゝよ雲ゝ[illegible]やとそれよりめくふふれる

さそふ[illegible]ちき袖をよ吸ふ[illegible]雲のこゝ[illegible]れこちる花なれるなくふ

花のもとにうゝよけるな。花よりよりよりよりゆるなるゆゝ[illegible]ゝまふ

おゝき数是ちり 花より降をうゝ 伝因よ長あをうゝ

あゝちかと名よゝゝゝゝれ 拐なとゝふまれなる人むまちけり

まちけりを待ゝてゝゝることちり 拐をそ名よゝゝそれとゝよ

ゝゝゝゝ

ちゝをゝふまゝゝゝゝゝ笑ゝゝゝゝ 妹とゝゝあゝふゝゝゝ夏のふ

冬夜よ 床どうゝゝゝ 浅日よゝぴゝゝをゝてゝゝゝゝ

秋をゝてあゝふゝゝゝゝ女良宮 あゝまれうゝゝふおひわゝゝゆゝ

浅日 ひゝをゝあけれゝゝゝゝゝ

[illegible]

ふしまろ伝ふをこう称 俤より苔をうゑ初る 苗のようなるもの

やゝ数多ゐ なりよりよりなるものとなり 松の下よりにしを浮てよ

[illegible]

新の下よりをこしをそくてこゑつ

[illegible]

月これハちゝ[illegible]

ちくやふる 神代もきゝ[illegible]三田川 うゝゝれなるふ[illegible]

川の下よりをこしをそくなの下よりをこしをそくてこゑつ

夕暮をくものくゝてふ[illegible]

こ橋のゆふべに傍らむ あふとも居ぬる人とあらしとかおもふ、
山の下にぞ　とそへてきくべし
吹きかへす風をたのむこ秋ふきぬらんもゆくら。ひとむらの緑の
このうへのたのむのにもちかきことのはなるなり
あかつきを見にもあかし 是そこれつとれて人の声とかくるとの
花のさきよかしとしるしるなるのまなれどもいふことをそへて
こころえべし

近江まで籠りて見れば枝の葉に秋をしらする あけぬ 此夜は
そうらあくを見ぬ初手にあくれなるなり 小田の桂の夕ぐれのさま
夢をさして見をとらへるなれどもふれしをつけるなり
雨ふれば小田のますらおいともあれや。苗代水をとふはちそめて
や。をおしとえらて定めたることなり

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

きくやいろるうるの立なるれこそもみまをるるたりうるを

松る侍をうるくう

面新のうるめるほそやくりけるまやむうしぬそてのなるくふ

四のるひ伊勢物語のををり

をくををれこをるる家れ初時面本の葉ををくふいろうるくる

初時面のトよにをくしををてををつくし

をくうをを尾ふりをくの思まをををくみをきのはゆをいこうよ宀

みりひまを をのそふるよいくををり

ろひいてこ宀をくりのををるるむきのふの手をれりをくの山凡

ひてをせのトよにをくしををくて紀れてし

いくをくをき宀亦弟ふる亦の志のふまろ内をくて種ををまるをく

二のるひうけをり志のふまるよ志字をうるくう

さくらはうつろふあれ書きたるとしまれよまちつる年なくぬらしけなく

し°を助字なり

忘れしの人はよきとのみ出ぬ道のゆくは書ふかくつくるまとよ

初句 忘れじと契りしのことなり

忘れしをりは却に摘をとらしめか袖に来てまたはの山川ご花

か°をうたがひのかなり

み狩くる宇治の橋ぞこえこそむいく世にまぬ°名のみこそ

ぬ°をねるそといふことなり上の下にぬ°としるそてぞあるへし

ゆく末にあふくま河のたえずせいしうくうせかしけふの紅をしのぶ

あふくま川に名にもなそをめくる

思ひ出るそのかたしのゝ宋の夕けむりむせぶ袖かし忘れうるさふ

紫を形は明声のそうそこそ縁きるに形えるさらめくる

みしの人の姻なりしゆつるそむつきしき恋ものうら

藤白のトよりそこをそくてをれて

ふる雨をていうこあくれとなるむらむ行なき山めこ絲の白そこ

藤白のトよりそこをそくてをれて

ちとくれよたのむ柴ちとあ屋と柴葉の仇ちあさのゆつくき

芝も藤白のトよりそこをそくてをれて

んあてよそこくやとしむ初恋のあさきゆくこせる恋くきくれ恋

藤白のトよりそこをそくてをれて　二ける　そ

をくくをくれぞらとりよこちり

今そをる見ひ出よわちきしこ忘れむくてのなをけちりけり

藤白のトよりそこをそくてをれて

きえもひぬうろふ人の秋のそふ身をこうる　ちこ利の下恋

三れ白秋は飽をうくくる四のタひうけちり

○うちひちト

永居をこそ思ふとことこそしるしくいとゝみゝ[illegible]事也[illegible]行てそるうゝ

陰日の下よりそそくてきゝて

あゝうりそ志賀のね雪をまれそふ後ろもとゝも[illegible]参れふるさゝ

陰日の下よなれくとゝふこゝをそくてきゝて

ちゝまなよ[illegible]志の〳〵柴まれうりそも爲こうるくき紬めうくうは

陰日の下よさそあゝされくとゝふこゝをそくてきゝて

[illegible]な[illegible]雅俗の秋代秋まの京ことうゝふもはいてるも

これ日の下よをすゝをそくてきゝて

神よりふけ[illegible]さそ月雅藤のゆめ[illegible]おもふうゝとゝりかゝうふ滝九

陰日の下よぶゝをそくてきゝて

うさ[illegible]一柴ゐゝとゝいそゝゝれ[illegible]おもひなうけゝ[illegible]おきり白居

陰日の下よそゝをそくてきゝて

まつの君を千代に八千代にさゝれ石の巌と成てこけのむすまて

八千代にいませとうたふなり

君か代は久しかるへしわたらひや五十鈴の川の流たえせて

やまとまひ出しのやうなり

めてたき大御世ハうやひとをも伝へれとはつかは枕となりもて
ゆきさつ歌まなびの友もいやさかえてよろこびあへるひとのある人
の世に多かれと其うちはなかなかに風き女な
らはへる八文字のくことを知らしてこよなくきさ用ゐちを風して
みせさしせ歌へさまさるくのかさいなし其く文学かむ人ゝを
こまやくきさまをえてまなびまなびさむるそ出こぬまてを
なし其きをよしなれかさとハやゝ誓ひてよみつのこゝろを
まうけつゝかなすと風きくよみなるのかくいへくひもなし
けふうるくもいつぬるきなれハ其らぬところのあさといふこゝめ
の木と学ひ習ひてもつはらさまは心見ゆれておのつから

叶ゐよいる人おさ〻ゐ為ちゆ由いいと行いまそゑ屋まろくて
ゑつどまくくほゆする人ゆ年よいと考めゆれもよまてを之ある
まーき事うーあくされい思ひなそうう一日二日一月二月とさき
ゆさていつーう毎日手もてゆ書く事毛考まゆちーめむ
此秋ゆちゆもむなといひつ行いつーふ考秋ちを孔くさきゑ
さくそられゆさけるさっちゆ行よくやこゑをとりふよゆう
めれと行思ひちあくゆりーまゑさ多く行めれていとりく
人ゆさくめさていひ出うくやさむうやちむと外ひゆーせと
とかくみちむさうくて思ひそあーゆ行ちゆみゆひあせまー
うく此行をさゆちゆ分ふくちをーくいうくさうゆーをなと

これくもちゆーき事と思くとうひなくー又今ゆ利まちひても
あくきをそとゆせてのこあうゆてつひふゆまく成める人も
いくゆ考うくーー又さやうふゆくのこいゆ思ひちゆ成ちまる
ちんのうくくみそあさくかよ然思ひなくうさくそなくる
いくゆ考うくーさて思ひいろゆちうくたくゆ行さうくーく
うく初る人ちまれくーよいあくれくそゆいくちまくなくて有ま
一人くなくなむあくくき又二ゑこゑ行て今くこと思ひ起て
変むくくあくくー又七ゑ八ゑこふくくゆ成てくちうふーーうゆ考
つて思ひ出て忘れをかなくうう出事たくちなくて行むなーく
きくくるるふふくどまくほーーく思ひーー初の行ゆ事なと思ひ起て

うえつふる母の行ちおくろき悔こなんきてたゝしわとゝあ
おつやりくよ入る人なゝもあるさ面なう古のゝくゝとかく
けるゝよ入ゝろ人をうゝけなるを申る人よさくめられて
うゝはゝむる事けるきよハもゝ多る事なりけるハあゝろ
いゝてゝ思ひ浦れゝなゝれゝかきれくなくゝて人或を迫さほ
とゝのをゝふゝよつけてゝまゝほゝく思ひ出るをゝしゝも人
のゝくむるよゝ利て思ひゝろ人なゝもあるまゝうゝてもおゝひ
ゝゝぬ人も又事井くゝふ思ひなゝくゝるゝ時ゝ人のゝくむゝる
つきてハさゝやゝるゝ世ひなゝるゝ又ゝもゝくむ世をつひよゝむ
事となれるゝもあゝくゝ人のゝくむゝる仮ゝてゝゝ初めむよハ

ゝ人ゝゝゝゝゝゝなゝてたゝくゝき事おゝつゝなけるる事
なゝをゝゝひきくよハやゝくゝ又その人も永ゝくめゝゝなれゝゝて
ゝと思ひてゝゝくき事なゝひゝゝせゝゝなゝくゝれくおのゝ
ゝゝゝゝよ仮ゝゝ思ひやゝをゝゝくゝゝて友ゝゝゝとゝふゝゝ
はゝゝむゝあゝ行ゝゝもゝゝゝゝゝ金ゝゝゝゝゝゝゝゝふよゝよ
仮ゝ欲てなゝゝゝゝゝゝゝゝゝ年く完本なゝたゝくゝゝゝゝゝ
ゝくゝゝゝゝゝゝゝ又精ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
なれゝおのゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

ましくして此ときハ外のひとよりも利つきて友かち
あひまはしきなりそれも同し経の友なりてハ心をれてされ
ことすけれもなきものなれて久しくおなし不もの友かちハよく
ものまぬしさわさるわけれさて家をよくなりてむとえて字まで
ま川初の経をてゐを此書文句の書なとハきてくいとし室て
よむへうれ文談よまむよてまそくこととく清ひひなとおけ右
さしむをいうとゑふを中くまひとことなり家をとかく何事
も一句まきるほとくきて前にひとのまるこのことともよろし
こきなり初よりも名のまとえてなまきをきるをきりてハ
さうまへ心いてきまうてまを句をまなまふつめられ　立柴

あくみそのひとかなれ心ままとひいてまてなそつくみよるとし
こうにへまちありて初を類林息抄草庵集此二れ出を五本
としてよくならふつきるまかの新類まてするまされとれ文の手とと
よるしうきるふもまのりてしかくめ何なも又申れく
えまてしても事たわめくなれいせさしおつし類林息抄ハ趣を
安らうまて風雅臣しく草庵集をとくよりいしき風をきわひて
うくしきをも経をつとめてあるなれく之の法式ハたくるる以
経もなきさ女なれそみ本として習ひ学ひん小あやまちなくる
つしまて此の二書をみ本とし類をまうけて多く習ひつし類も
むつしきハさしおきて心やすきをえらひてその主をまきたる利

さて欲を教ゆるくよろこびつる先一なれそどうろうをまて
ばうばはよりもむしきこゝろをすゝめれとゑくゝまされる物
のひやうなれはいとけ難しかゝて師の仰よりつゝ拙して
深制をこひ行ても志ゝさる事ハとひきこゝろなるさをを
もいつゝとゝもむ事を必為ならもしてしかゝなれとゝ
為れゝゝれとのなりさるハさはうあるゝとふうと思ふ事
事をゝちてゝひきゝゝれさまなれと決してさやうふ思ふ拙よて
あれ師ゝる人と行ても為ゝ称きくかゝをうと思ふ義
なれゝゝかゝゝとひきゝゝへきさいゝゝ為ゝゝなゝひ学ふ
こゝなれゝゝれをゝちてゝゝふあゝきゝゝゝゝあゝ

さて志のかゝゝよゝゝみるゝよ歌よ作例あゝ事なり生作例よ
ゝて色ゝよゝゝれさる拙よゝんゝてゝゝゝ学ふへきゝゝ為なゝ
作例ゝ花ハ歌ハ部ハ月ハ雪ハ雪とおのゝを物ゝゝあゝてゝ
ゝむしきハまおのゝゝ大作例ゝまゝあゝそゝいゝゝ
ゝゝゝみるゝひ事れる言ゝを見て知しゝくのかく作例をむ
拙ゝゝれよゝゝれてゝなゝゝめやゝいひてゝを見て言ゝを
思ふゝをのゝいふさまよハあゝてんの作れゝをまゝけよむ
事と思ふ人もあゝゝれと志ゝハあゝを事ゝまけゝゝも
れ意よゝむやゝふ歌ハ歌ハふのまふいひてゝをゝやひる
して信なゝゝハハゝゝ作例よゝゝれる作事ふ学事も

なれたるふことなきを初学のかたくつくるのぞまもてゝ作
俗よゝしくしていひさまやびたる仮名なる事かり春歌
者よ人の言を多くうゝふ岩波のされとかく作例まうれて
たるくはつやゝうまとちをつるそゝ
○古今集ハ後の世れ言のもとゝて何紀となるもゝ風体集より
出ゝる事なれとも紀と何さまなるとよく味ひ考へ事なれハ
いくゝくひもくうゝしとおゝえてそゝむまくきゝなり源よ
後撰集拾遺集ともゝ多ふ歌よとゝかゝる言とも多れて見るも
ゝ見えを色つきなり後拾遺集の比何のつひさよ艶ある一つの
ものゝいてまゝうゝやゝ多集集より紀ととうけてゝある

と三代集よりゝてハいつゝ考れゝうてさ面ゝまうけなゝ
てゝあるゝ考ゝいうゝくの抵抗ゝておのつゝうなる和あゝを体集
のゝろゝ利今作ゝとみのせゝさ面なゝて今の世の言れ
さまふハ成事よけなゝ利さて新古今集ハ比抵抗ゝ言乃
さ和ゝうゝて続れゝる上ゝ世れ多ゝ何のゝちひさまいと
うゝけゝくゝ世れゝゝくまゝかゝなゝとゝひゝいとゝそてなゝさゝ言
ゝいと多ゝうけゝうけゝふゝ学ひゝまゝはゝれゝとゝやゝくゝみ
ゝくき事よあゝくゝ言れゝさゝ多ゝうゝくゝ作ゝうゝも人ゝても係ゝむ
ゝるゝいと新ゝゝまゝていゝまゝゝきゝゝ和ゝ初学の人なゝゝゝう
言ても及ゝくゝ色をゝひゝ学ゝゝあゝゝうゝゝちゝとのゝいゝて事ゝけ

生ハかゝるこゝろにとのまゝるまとをなとれ

○歌を詞うるはしくきこゆるきうゆ一の事なれとをふるき詞

を撰ひいさこうてもあしき詞をけきき月ひさるやううて

詞いうよ一そきこゆとこゝきかりなきさきたとひけ物きこゆきか

さるかゝて又をつひさ月いひさまふりてたなし詞も

よくもけえあしくもけえあるきとゝ詞とゝるをつひさ月ひく

きをうゝなとゝるしうゝされとあしくなり又ゝうき詞もを

月ひさまつけさもふりてゆしもあしけきこゝえぬこゝる

めるあれて詞をきつうひさ月ひさまるゝ事なりされて

きつひさ月ひさ月ひなゝふゝ心とゝちめくきゝゝさなりまゝ

続とめつゝしくたゝふ詞の月ひさまうゝけしくいゝなるハふ

とさゝなりいうゝ続とめつゝしくふるくくなりゝも言葉乃

けゝひさ月侵なゝけゝきゝゝるをゝあさきあくき

ゝさなり空虫の言葉かゝ玉よりゝ事なとゝるも詞の月ひ

さまゝ調おとゝきハけゝさゝ月よきゝえてあくまゝしくおゝゆゝを

いひさまつゝれく詞のきくなと空しゝうけるハんのとまゝる

へくゝもあゝめをまゝてゝきこゝをとゝ三十一字よのくきゝるけゝ

なゝるをいふひるくんくゝをくて言葉なとゝるハ並くよ

てゝおとゝとゝ月よ月えゝ又拍きゝりきておのつゝうゝたくくと

こゝゝくくいくゝなりけなゝてんゝるくくをあけるむ

又万葉の歌などにてもあるなれどもおほく詞の用ひざまなどいふに
よろしきは一ふしありてんにもとどまる事なるを上下此詞の
はたらけるなど後世のさまにてことなる詞のことにめづらしく
きこゆるはある作をつき〱むやうにて中となるうたそうし
されて詞のゝしくはたらけるさまの優なるそのかたをこそ見るべきなれど未
よき詞をえらび用ひざまを続けうるなどいふ心を付べき事なる
どもかく詞といふこそれ呂ふるに？いふなる詞をもみつかは
つかひ少しき詞文はあまたある詞なりとも耳なれぬはいふそのや
さてを文字にもおとしをとして文字なまでに本つたるにはしもあらぬ
もあれど耳にしみて聞くるしき多し耳のなれぬ文字などまじりたる文

文は実なれどやさしく二つあるなどを使ふべし文のとくも詞にも
多くかさなりたるを使ふべし文どもかさねていふは何しきさ
事ぞかしくありと見えさせて耳なるもてはやしき文字くとし
なるものなまかさなりたるをてても聞ぐるしきことのなきも
まりて左なればつゞまもりつゝみて聞ぐるしめさまなる文字を
んなくきこともあり又字詞またはあいうおの四字多しなるの
なかうにあることとそて加しらにある八辻限にあるは辻四字此
おも聞ぐるしけれど然もまじきことなる文本の四字の中にも
詞さまふまりて聞ぐるしめもあることは有あることなくそ
おかゆれどいまだ考へをいさゝかても聞ぐるしぬをもんして

用ゐべかりけれど又古より法式なりといへるハさまでおほし
き中にも用ゐべき事どもなれバ又用ひきたりてよき
事どもまじりたれハおのづからさけまじへてよむべきなり
○後世の題詠をかたむつかしきハあながちに古き事に
ふれたる物をみてよめる古風のさましくことにふれ物と
なれバそのことのよせことばの縁なくてもよろしきを題詠ハ
題さへに題をまうけてよむ事なれバその題のゆゑかれ動かさる
ることもなれば歌よき言葉をもちて海なくも山ありハ山
は海山につきたるにはとりて一首の上もさし海をへきなり
海山とあるにはそのよせなくてハ歌うまして海山といへる詮なけ

ればなり
○歌学者といふべきさまにて古書の事を明らかに註して歌をはな
とはいちのことそれを学びて歌よ歌ハよまれざるまじくそれか小
ふれてよめる事なきをあるハまた他抄に掲るにて八歌をよむ事を
学ぶとさるゆゑなる事を学ぶと歌をよむを学ぶとハひとつる
なるやうあれど別なるものにていふべき歌をよく心あきらめん
てふこそ詞なき難ひろからんよむてことを学びそれをしてハ
よろしき歌なるハいてくべきとのみあれされど大体歌よむ事を
おもふにてむずハ一通りの事をも学ぶべきなることをさとりてぞ
不自由なる事もあるべく又大既歌よくもむといへるはうろ小

なりてをてるをくもおのつからとのひ詞の活るとをさく
さうふことをなさうめしと拵くのびるなとひるなと拵う
るきまくきつさもむをくらとしうるくきこれるあるをやさて又
言を解しー詞のとちひさをてるをとれつうひやうなとくそしく
るきさくころうるさいとをところ拵をる字老ちいうてい
欲ふこれうるまをるくしいうとなれい字ハいとくあやしく
くまくしくくうくなるとのうてを味詞のつうひさをてをとをなを
実の不をを後まもひ能く爺るもをしかくしされ幸を
きる字老の方ハこつうこ字をどるまをれいるのむうる示もくを釋
きるまをてのを味なるを欲ふこれ方ハ老をたをを所とのーてを味

用ひさまをなをふなれくるこをなれくおのつからを俄のを味を
ふく雑へふを拵くるへ引れてをる教のを味の詞よひ能さ幸ハ
言ふうくうをむ人をおのつからうをるき幸なるうー
○学問をとをを利言のるふ伝ふ行るをる方ハあるをを
るて又を中ふうれるよハ方あるも叶るをよハ方なるをる
かのるをるをハ方なるも叶るをよハ方あるも行るてひるむきな
らんをまくをるるるをるもおしーるるるてあるとをるもあり
さやるの人ハ必ずをるむるこををえせるれをとる出て見をいつ
くるうりのるをハ方ハ方あるるる又いるを方行るるをもつるむる
事なふをるるるをハ出来る事かるーハ方をるをたるをなく

ならひおこたらずつとむる時ハ言切積りてこゝろてもある人よりは
まさりてよく出来る物なりといふ志りくいとよまれぬ人ハ
たゞいとまおほかるとのなき此類なる文学にておもふかく
ものあらぬ事と思ふとそれさしもあれ精おこたるなく
つとめよくきれいにまじはりあつて後ふる出来事なりしの教子
とも此歌なれうたありされと晩学にてさのミおもひくつせる
つきことふあらぬとてくゆまれおこたれつひにえよまぬな
きくをあはれなる
○たゞ歌よむ事のうまき人とおもふ人と行き見ハ上手下手ハ
よらぬことにてよくよむ人もおそく不達者なるありいまた

きゝさ人にも達者にてはやくおもふもうつり見るさまにおもひてゐる
くもきゝつしされとよくよむといふ人計にてハ半歳五十首
或ハ一夜百首の会などにおてもそのうちに初てなりにおもなる
こゝなれと不達者なるハたゞハ出来る事のおそきとのなり
○よめる歌は面白のしらる所とぬ不りまへいと多かるなるに
たゞ緑草をえらふにふくさえなとおのつからとくの不りす詞乃
つゞひさまなるをきゝく語る遠ふ事なくまれくいさくは
まかせとなれるいとまくなくして地場の不おもしなくて
よろしけれと多くの中にはそと見えて察へき歌のうたき人も
ありて文地場のよき歌あしくてはそれは歌のつゞきさまなと

ともまれくなるひまもなくうるはしくなるとこうやうにうれし又一そのことはとゆるなる又調ひさしく又上下ゝ合性ちうにかをとかく調ひさまはやくしうになるべしよくてまつしうさうさう三の多き中ふふと執をいひさまなとさうくきまれるもいかてとうくなちたの二つとも今一きさ格あるよんを見ひ結おしつとめそひなく地場の豆しきをいくり豆しくなちもてりてを中よおのつうつうきさうもつと出まあくく又地場のあしきもおのつうつうなるかてを中めうきさうと行けちよくなちゆくきこうれてうもとうくくくくおほゆき

○是小徐茶を多く添剤をうるたくあしきかいけつり調てある不を玉しなと思ふまくよいうあうもなるさくあり小人とあるくれと添剤をうをいうもむつうさ物をそふみさまふふを玉しかくてとうくんいくとうくくくくんよ叶とあたと多しをうしといさくうくむよはそくて玉てできるをあるよくてて一白二白も玉しくさ水と玉せをを不をくうしれとを玉しくふつきてまて上白よ玉さ緑ハなくあ不いそき又一白のうち玉さむとまくふ字数くうに或を條うなくして玉しく新くく又上白と下白とうけ合ちしうくけうをなと上白をなをにくうくまくうくさ下白をなをにくうくさかと

呂びくるくてもしのもくなき方ふもる事なりまくてらくらと
と也しのもくなき方快うるくるれいるりまくたく一文字と二文字
て一それと笑こうくくとくはくるをとありてくるゆもび
めくくぜといるくもも也しの能くてさておくもあり又初ふ文字
あるをこれなんと用なき詞あるとのをきてはくきこと柴を
おうむまふくくと呂び出れかくくく　てろびくうくるすとありふ文字
七をくくとなの字数さくくまりる和なれくもしかくきまもも多
したくハ　うくむる首の柴　へてつる中ゑれとうくきをさてて
一字多りれて　恨む首の柴　陽つ中ゑなとうび　能そうくしき
ゆ。そうくめくきとうくきを能そうくしくゆそうくめくな

とうび　あくくびくるる　なくるるとうそなとうくきを二文字たくはる
ふどうて　あくくるる。れ　なくくる。うくてなくこうび　猶ハ　ふハと
いくきを四くるて一字くくくれハ　猶ふハ　ゑふをなくるふ。
を加へなくくるる也くくびさまくいくる多くくる苦ふうれる也
やもきくくる也くくきくとうのかてあくきさ角なくるもあくきふ
を也くなくるれハ空くくきさ方くるなれまくてハ空くくきさまなるる
めくあきふの也くかくくるまくくてをゆすかくくて拾ら
なくるいうかくてふかくくるまをめ事くも多くくれくるにくくき
事くるさまくあくくとさのくうくうくきくくふ。うくれ又能くるもく
くくくくそかきくくかくくなも

○永久よりこのかた詞のもちひかたもくるしくなりつゝ
ありかなきものとなりはてゝ今はかかるまがこと
ばかりをとゝのへ雅言をもちひることはいとまれ
にけれどもなほざりにとゝのへてもてはやすめ
ることゝ物語或は記録或は往来物なとの書面文義
をはやうもてはやすことをのみ世の中にはた
てもてはやすことゝなりぬ一言ノ事とて一言をもこ
とあて始終小押法ゝ一言といふもなかさりに
ゝとさだめ法ゝをさめて考へ出たる事ともを赤相宮
ゝ入やうにせられたるひとへにもとゝ古をあ

らそひたるさまをいとゝもよ古典歌の学問をとゝ
のへられてきまて後世のよはあれ古をこゝろ
ゝる事所寓の歌をとゝ〳〵えてふ作きまてその例をあ
ゝ作ゝもるまゝ例いとゝ〳〵おこそうして一つもなくゝ
こゝろ〳〵しくゝ日蝕月蝕のさまを知ることゝ天上地下てを
さまをとゝ物語るれ物を日月のめぐりて事の正しく
いとゝうたゝふるれちきを和をもちゝてお〳〵学ぶ
日毎のめぐり例の法のおのゝうゝいとゝ正しくなりて
されてなりてれを見ふる全ふの例とゝふ物をまことゝ
あやしくゝとゝ〳〵なる事をもれていとゝふとゝさて

やちまつけさまを解くもつむと思ふ〜えあ十音を探さ〜〜〜
行くむとうゝえそさくとねゝらふええうゝんえて アイウエオを
阿行カキクケコを加行サシスセソを佐行タチツテトを多行ナ
ニヌネノを奈行ハヒフヘホを波行ミムメモを麻行ヤイユエヨ
を也行ラリルレロを羅行ワヰウヱヲを和行さて牙一の音は
アカサタナハマヤラワ牙二の音をイキシチニヒミイリ牙三
の音をウクスツヌフムユルウ牙四の音をエケセテネヘメエレヱ
牙五の音をオコソトノホモヨロヲ右等の事をとくと弘めて
辭をくく阿行とくく阿行の文字加行とくく加行の文字なと用
のまくようゝひ又牙二の音とくくイキシチニヒミイリ牙

四の音とくくエケセテネヘメエレヱの文字用さきくくふ
くとうまようゝ見之金くきるうさてたくく加行の牙五
の音をイとうまようコと書く奈行の牙四は音いイとうまようネと
書く麻行の牙三は音いイとうまようムと書く羅行の牙二は音を
イとうまふりと書く又シ文字をいうまとうまふよ佐行の牙二は音
とくくテ文字をいうまとうまふと多行の牙四の音をくくポ
文字をいうまとうまふよ波行の牙五の音と書くユくくをいう
ふとうまふよ也行牙三は音とくくていさくくをとくたふうなく
ちさふやうまくくうゝむまてい係よ思業をるやゝけるまてい
ゆうあをなれくいうまもうゝ見えるむくきるうさてたまくる

ことゝを　をゝくゝとゝゝく　ゝゝゝ

うゑて産波行なりを麻行四段の活用なり羅行まてを ちん
つん ふん 右のかく第一の言ラりんのてをとを受れて
知詑路なりハ羅行四段の活用を繁なり一段の活用を加行まてを
きん奈行まてを ぬん波行まてを むん麻行まてを えん也行ま
てを いん和行まてを みん右のごとくいて皆その行の第二の言
キニヒミイ耳りんのてをとをうゑれて若似于見射居なと
一段の活用なり氏活用を第二の言一言のえなれていとかなし
中二段の活用を加行まてを おきん まきん つきん右のかく第二
の言キりんのてをとを受れて起るをなとを加行中二段の
活用なり多行まてを くちん とちん そちん右のごとく第二の言

于りんのてをとを受れて朽閉厚なりハ多行中二段の活用
なり波行まてハ おひん こひん そひん右のかく第二の言ひん
んのてをとをうゑれて生意強なりを波行中二段の活用なり
麻行まてを あみん うみん右のかく麻行の第二の言みん和
んのてをとを受れて活恨なりハ麻行中二段の活用なり也行を
を おいん くいん右のかく第二の言いりんのてをとを受れ
て老悔なりを也行中二段の活用を繁なり羅行まてを こりん
ふりん右のかく第二の言りりんのてをとをうゑれて懲舊
なりを羅行中二段のごとき活用なり和行まてを ひきゐん右の
かく第二の言耳りりんのてをとをうゑれて率を和行中二段

の活用ちう下二段の活用を阿行ときて　えんたのかく牙四の言
エよりんのてゝをとをうゝれて得を阿行下二段の活ゝ変なり
加行ときて　うけん　ゝきけん　つけんたのかく牙四の言ケうう
んのてゝをとをうゝれて受助積なりを加行下二段の活用ちう
佐行ときて　あくせん　うせん　やせんたのこゝく牙四れ言せる紀
んのてゝをとをうゝれて合炙痩なりを佐行下二段の活用ちう
多行ときて　いてん　ときてん　へゝてんたのこゝく牙四の言テうう
んのてゝをとをうゝれて出拾蹟なりを多行下二段の活ゝ変ちう
奈行ときて　かさ彩ん　ゝう彩ん　彩んたのかく牙四れ言ネうう
んのてゝをとをうゝれて生殺寐なりを奈行下二段の活用なりを

波行ときて　えん　つえん　へんたのかく牙四の言ヘうんの
てゝをとをうゝれて替仕経なりを波行下二段の活用ちう麻行
ときて　さめん　まゝめん　とゝめんたのかく牙四れ言メうんの
てゝをとをうゝれて芝進止なりを麻行下二段の活用ちう也行
ときて　きえん　ゝえん　さゝえんたのこゝく牙四れ言エうんの
てゝをとをうゝれて消越呆なりを也行下二段の活用ちう羅行
ときて　かれん　なゝれん　ふれんたのこゝく牙四の言レうんの
てゝをとをうゝれて枯流鰯なりを羅行下二段の活用ちう和行
ときて　うをん　うえん　けをんたのかく牙四れ言ヱうんのて
ゝをとを受れて植餓居なりを和行下二段の活用ちうまて四段の

活用を加行まてをカキクケ波行まてハヒフヘとを行の第一ハ
ゐまち波第四段まらくなり一段の活用を奈行まてをニ
ニル ニレ也行まてをイ イル イレと活きてま行の第二の言ハま
まて一段の活用を中二段の活用を多行まてをチツ ツル ツレ
麻行まてをミ ムル ムレとを行の第二の言第三ハ言と四段の
活の中二段ハ活くなり下二段の活言葉を佐行まてをセ スル
スレ羅行まてをレ ルル ルレとを行の第四の言と第三ハ言と二
段ハ活きて四段の活の下二段なり太のうち一段の活用中二段の
活用下二段の活用ハ・下を付ルレをそていふる又言な
ほ此ことやちまふくくく

活ことゝなり又落孤なることゝ伊の活須そといつる　おちん　おつ
おつる　おつれ　くちん　くつ　くつる　くつれと活きて多行の牙
二の言ヲ　ゆゝんのてゝをゝとうけてチツと二段よ活けを多行中二
段の活須なり又赦舊なることゝ伊の活を葉そといつる　ゆりん
ゆる　ゆゝく　ゆゝれ　ふりん　ふる　ふゝく　ふゝれと活きて羅行の
牙二の言りゝゝんのてゝをゝを受てリルと活けハ羅行中二段の
活須なり又任瘦なることゝ伊の活を葉そといつる　まらぜん　まる
まらる　まらまれ　やせん　やま　やまる　やまれなと活きて
佐行牙四れ言ぜゝゝんのてゝをゝを受てせスと二段よ活けを佐行
の下二段の活須なり又美誉なることゝ伊の活須そといつる　ぜめん

ぜむ　ぜむる　ぜむれ　ゐめん　ゐむ　ゐむる　ゐむれと活きて
麻行の牙四れ言メゝゝんのてゝをゝをうけてメムと二段よ活けを
麻行下二段の活須なり毛笠の本をうく辯之しされく牙一の言
ゝんのてゝをゝをうけていくる須を罷の活須牙二の言ゝんの
てゝをゝをうけていくく須を一段の活須と中二段の活須牙四
の言ゝんのてゝをゝをうけていくく須を下二段の活須なり
まくて掏をおゝゆるゝ欲ゝそをおゝゝやゝ言れゝ
んのてゝゝく四ゝゝうくくるゝそ下二段四段を一切言ゝ剥そいつる
一段と中二段ゝゝゝ二れ言ゝゝんのてゝをゝをうけていつなり
又四段の活須を牙三れ言ゝゝゝ辯言ゝつきて　ふゝれ　ふゝ橋

まつ人なとゝひ一段の活用を牙二の言よるゝ　をそくて　雅言よ
續くるなり　ゆる母　いる爰なとゝひ中二段の活用と下二段の
活用を牙三れ言ふるゝ　をそくて　雅言ふ續くるなり　おくる　敬
くゝるんなとゝひ　うくる　いつる母　さもる爰なとゝひつゝさ
まちと言くゝ　又るれの文字を牙二の言ふそくてはるとゝ
言葉を一段の活用牙三れ言ふる北の文字をそくてくゝるかを
こゝくゝを中二段の活用と下二段のくゝくゝき言葉ちり
るれのをゝ　こゝるくゝなるくゝも牙二れ言よるゝを一段
雅言をこゝ利いゝを罪ちり二ゝるをそくて　つゝを一段
これ言ふるゝ　をそくて　雅言ふくゝ出くゝを中と下ちり

又ゝそくて　れ行する　段を罪段の活ハ牙罪れ言をそのよく　変ゝ
言ゝよゝ　なとゝひ一段の活中二段の活を牙二れ言よゝ
をそくて　ゆる　れきる　れるとゝなとゝひ下二段の活を牙罪の
言ふゝ　をそくて　こやそる　み代も奉ゝなとゝひ
ゆゝ　おなする　段をゝくゝ　ゆる下紀の段ちり
罪れ言を罪段をそくふ下紀ゝゝ下二段ゝハゝをそくて　つゝ
一段と中二段をゝ二れ言ゝ　をそくて　下紀とする言ちり
又阿奈也　和の罪行ゝを罪段の活段なゝゝ　阿佐多羅の罪行ゝハ
一段の活段なゝゝ　阿佐奈の三行ゝを中二段の活段なゝ下二段
の活言葉ハこゝゝ行ゝ　ゝめゝをそくゝ　ゝゝ

おくべきなりさてよるづる事ども大雑ら〻ろろ[illegible]なる
古歌をとりいでゝそのあるべき言葉をうるとふ行のうる
らきことはとり事をもるてきろうるしそを代集の
言をゐ十そ百首二百そなるとりつてくるものをくきなりそ
のもるしまゐひるるふあるるもるし

タ行中二段 ハ行四段
独ひちて踏ひしゝ水めるれまるを考へるふのゐやるるむ
ラ行四段 カ行四段

一行段 サ行四段
ろるるせて抑猶をこきさやせてるやるるもるのるしきなれける
カ行四段 サ行下二段

カ行四段
菱山なるゝかるゝきれんあるるゝ物ゆゝふ変なきるつせるゝ
ラ行四段 ハ行四段 サ行下二段

ハ行中二段 日 ハ行四段
るひしてゐゆ夜るるる天川考もやるるあけまるゐるるなん
タ行四段 ラ行四段 カ行下二段 ラ行四段

カ行四段 ラ行四段
なきわるる唐の涙やおちつゝむ物ゆゆふ常の義はしのはゆ
タ行中二段 ハ行四段

ハ行四段 ラ行四段 カ行四段 カ行四段
白玉は不もるるるゝ為けるゐるるもさゝむるるるるき
カ行四段 一行一段

ハ行四段 ラ行下二段 ハ行中二段 ラ行四段 カ行下二段
うるるは思ひ乱れてるるるふと時るるるめやへしつけるる

八行中二段 日 ／ タ行四段 ／ ナ行下二段 ／ カ行四段 ／ ハ行四段

そひてうちもるゆきをみれはうちをはなれうちもむ

カ行四段 ／ タ行四段 ／ ラ行四段 ／ ハ行四段 ／ カ行四段 ／ ラ行四段

石ゐゆくゑのゑにうつりかくそそそえめあうえをいうをゑ

サ行四段 ／ ハ行四段 ／ カ行中二段 ／ ハ行下二段 ／ ラ行四段

ふてをひおきてうをゑ代を神を志ゑゑむ永君めゑゑん

須受能耶　藏板

印刷并發行者　愛知縣名古屋市玉屋町廿九番戸　片野東四郎

發行所　京都三條通寺町東　福井源次郎

同　大阪心齋橋筋備後町　吉岡平助

同　東京日本橋區通壹丁目　大倉孫兵衛

同　東京京橋區南傳馬町二丁目　吉川半七

同　東京淺草區北東仲町　吉田久兵衛